

ハイエク全集 -5 政治学論集「自由主義の再興に向けて(1) - 歴史家とヨーロッパの未来 - 」

春秋社 2009 年 12 月 20 日刊を読む

歴史家とヨーロッパの未来 - 敗戦後のドイツの行方 -

- 1 . 第二次世界大戦終結後、共通のヨーロッパ文明とでもいえるものを再建できるか否かは、大戦直後の数年間の展開にかかっている。ドイツ崩壊に伴うであろう事態はきわめて破壊的で、中央ヨーロッパ全域を、何世代にもわたって、あるいは永久に、ヨーロッパ文明の勢力圏外に置くことにもなりかねない。そうなれば、事態は中央ヨーロッパに限定されるとは考えられない。また、もしヨーロッパが野蛮の道を逆戻りすることにでもなれば、たとえ新しい文明が最終的には生まれていくとしても、イギリスがその影響を免れることはありえない。イギリスの未来は、ヨーロッパの未来と深く結びついている。そして、好むと好まざるとにかかわらず、ヨーロッパの未来は、ドイツでの事態に大きく左右されることになるだろう。したがって、われわれとしては、ドイツを再びこちらの仲間引き入れて、ヨーロッパ文明の基盤であった価値基準をともにめざしてゆけるように、努力しなければならない。その価値基準こそが、理想を現実のものにしようとする努力の出発点、基盤を形成するのである。
- 2 . この目的達成のためになにができるかを考える前に、敗北したドイツでは、どのような知的、道徳的状況が予想されるか、現実的な目で見てみよう。確実にいえるのは、勝利した後とはいっても、敗者に力づくでわれわれの望む思想を押しつけることはできないということ、可能なのは、明るい将来に向けた発展を手助けする程度のものであること、そして、変節を迫るような下手な試みはかえって、われわれの目的とは反対の結果を生むことになるかもしれない、ということである。二種類の極論が未だに開かれるようだが、この二つはどちらも、単純で、誤解を招きやすい。一つは、ドイツ人は皆一様に墮落しているから、新しい世代にたいして外から新たな教育を強制的に施すしか、彼らを変えることはできないというものだ。もう一つは、ドイツ人大衆は、現在の指導層から解放されれば、すぐにでも、われわれに似た政治観、道徳観を受け入れることができるというものだ。
- 3 . 実際は、この二つの見方より、複雑なものだろう。たしかに、ドイツには、道徳的にも知的にも荒廃した砂漠が広がっているだろう。だが、そこには、数多くのオアシスも存在している。中には豊かなものもあるが、そのどれもが他と孤立してしまっている。その特徴としては、ナチスへの抵抗と、おそらく共産主義にたいする反対以外には共通の伝統が欠如していること、また、共通の信条の欠如、あらゆる政治的理念への深い幻滅感、そして、政治的行動の成果についての懐疑的ある

いは冷笑的な見方がある。最初のうちは、善き意志というのも見られるだろうが、共通の道徳的・政治的伝統という人びとを結びつける要素がなければ、善き意図というのは無力なものだ。われわれはそうした伝統を当然のものと見ているが、ドイツでは、12 年間に及ぶ完璧な断絶状態のあいだに、その絆は、多くのイギリス人の想像を越えるほどに、徹底的に破壊されてしまった。

4 . だが、その一方で、残されたオアシスのなかには、知的に非常に高いレベルのものがあるということも、頭に入れておかななくてはならない。また、多くのドイツ人は、われわれがまだ学んでいないことを学んだこと、また、経験に裏打ちされて強固になったドイツ人の精神には、われわれの考え方などナイーブで単細胞的に映るだろうことも、心しておくべきだ。ナチス体制下で討論は妨害されてはいるものの、決してなくなってしまったわけではない。戦時下ドイツの著作のいくつかに目を通して見たかぎり、(また最近調べたドイツの全出版物リストから見て)社会的、政治的問題にかんして、戦時下に行われた学問的議論の知的レベルは、イギリスと比べて決して低くはないという印象をもった。おそらくこれは、ドイツの知識人の多くが、戦争にかかわる行為から事前に締めだされたか、自ら拒否したか、のどちらかによるものだろう。

5 . われわれが望みを託し、できるかぎりの助力を与えるべきは、まさにこのように身を処してきたドイツ人である。ドイツの全人口のなかでは、その数は多くはない。だが、独自の思索を行える人間というならば、どの国と比べても見劣りのする数ではない。そうした人びとを見つけだし、彼らのドイツ国内での評判に傷をつけることなく、後押しするというのは、非常に困難で細心の注意を要する任務だ。彼らが自分たちの考えを広めるためには、外からの精神的、物質的援助がある程度必要だろう。だが同時に、戦勝国の作った占領統治機関が彼らを利用しようとする試みからも、理想を共有する他国の人びととの関係を再開し、支持を得ようとするだろうが、その一方で、どんな形であれ、戦勝者の統治機構の道具となるのを渋るのは当然であろう。対等な人間として、基本的な理想を共有する双方の人びとが話しあえる機会を意識的に設けることをしないかぎり、すぐにそうした接触が再開するとは思えない。また、こうした機会はしばらくは、われわれの側から率先して働きかけなければ生まれてはこない。そして、その努力が実を結ぶためには、政府機関をつうじてではなく、個人の努力をつうじて行われなければならない、と私は確信している。

P5 ~ 7

- 2010 年 1 月 12 日 林明夫記 -